

「森のようちえん」と「林業」の 意外な関係

岐阜県立森林文化アカデミー

萩原 裕作

近頃、テレビや新聞で「森のようちえん」という言葉をよく耳にしませんか？

デンマークのひとりのお母さんが子どもを森の中で育てたことから始まったこの活動は、やがてヨーロッパ各地に広まり、日本でも現在70以上の団体が活動するまでになりました。

単発的なものから毎日実施されるものまでその形態は多様ですが、園舎ではなく森や川、海など自然環境の中で幼児を保育しているのが一般的です。

この森のようちえん、実は林業と深い関係にあると聞いて、皆さんピンとききますか？お隣の韓国では、林野庁が森のようちえんに関する調査を始めたそうです。そして森林文化アカデミーでも授業と研究の一環で森のようちえんプロジェクトを実施しています。

森のようちえんは、林業にとって 一体どんなメリットがあるのでしょうか？



●未来の林業を支える応援団づくり

ある脳科学者によると、0歳から7歳までの五感体験がその子の人格形成に大きく影響しているそうです。その重要な幼児期に、裸足で落ち葉の上を歩き、朝の森の匂いを嗅ぎ、木の枝を握りしめ、葉の揺れる音に耳を傾ける心地よさを体験した子どもは、どんな大人になるのでしょうか？きっと木や森とのつながりを心の中に保ち続け、様々な立場で林業を支えてくれる心強い応援団（理解者&消費者）になってくれると私は信じています。実はこの考え、国産材利用促進をねらいとする「木育（もくいく）」の基本概念とも重なります。木こりのごとく、何十年も先の実りを信じて、幼い子どもたちの心にタネを撒き続けていきたいものです。

●頼もしい現代の応援団候補

「そんなこと言っても幼児が大人になるまでとても待てないよ!」という方、実は応援団候補がすぐ近くに居ることをお気づきですか？子どもたちを見守る保護者たちです。出産を通して生命の神秘や本当に大切なも

のを再認識して間もないこの時期は、大人がもう一度森とつながる絶好のチャンスでもあります。

子どもたちのために「森や山に対して責任を持った行動をとりたい」「どうせ買うなら高価でも、良質のものが欲しい」と考える頼もしい林業の応援団（理解者&消費者）が森のようちえんをきっかけに作られていく可能性があるのです。



●地域活性化の素

森のようちえん活動をしていると、保護者以外にも様々な人が集まってきます。地域の餅つき名人やクラフト名人、若手芸術家から物知りお爺さんまで。森は幼児をきっかけに異年齢交流の場となり、ゆるやかに人々がつながる空間となります。

森のようちえんを通して成長しているのは、もしかすると子どもたちよりも周りの大人たちなのかもしれません。幼児の言動に心動かされ、考えさせられ、学び、互いに成長していきます。そこはまるで生涯学習の場のようなでもあります。

林業の現場となる山村地域も、森のようちえんをきっかけに活性化できるのではないのでしょうか。地域が元気になれば林業も元気になるはず。もしかすると高いお金を出してコンサルタントを呼ぶよりも、効果があるかもしれませんね。

●森林空間を利用した新たなビジネスモデル

このように森のようちえんは、単なる幼児教育や環境教育の枠をはるかに超えた活動と言えます。林業を支える応援団（理解者&消費者）を作る機能のほかにも、次世代を担う子どもたちを虫食み続ける諸問題（体力低下、ストレス、ゲーム脳など）の予防機能としての需要が予想されます。こうしたことから、森のようちえんは、森林空間を活用した新たな機能、そしてビジネスモデルとしての可能性を秘めており、今後様々な形で社会に貢献していくことでしょう。未来の日本の人材づくりのカギが、森林空間にあるってちょっとうれいすよね。その事実がさらに多くの注目を集め、林業に対する理解がより一層深まっていくことを期待しています。

みなさんも、子どもたちと一緒に森に出かけてみませんか？

